

③③ うわば (大蛇) の巢

金谷の山から清どんが何やらかついできた。

「おっちゃん、ほれ何じえいの。おとろしい。」と、子供らがとりまいた。

「じりゃ、うわばの頭やぞ。」

「むいにあつた。」

「きの、浄覚坊へたくもんしに行ったらな、大岩とここのうわばが寝てたんや。」
清どんは話し出した。

「つっぺんに穴あいてるうわばの巢の岩か。」

「おっちゃん、子供は近よつたらあかんていつたぞ。」

「ほや、ほの横のかしの木の根つこにたくもん積んどいたんや。ほの上につがとぐろ巻いて
大いびきかいて寝てたんやぞ。うわばは「ぺん寝ると七日も寝つづけるちゅうでな。藤づる切っ
てきて、鼻の穴にちっくりさして、かしの木にゆわえてな、火うち石でたくもん火つけてやっ

た。ほしたら煙にいぶされて目さましたんや。」

「ほとびぶいつた。」

「ほしたらな、さかさまに櫂の木に巻きあがったわ。ほんでうらは帰って
しもた。」

今日もついつぺんたしかめに行ったら、木からどたとたれさがって死
んびた。

ほれ、この頭だけちよんぎって持ってきたんや。」

「ほんならもう大岩とこで遊んでもいいんやな。」

清どんはうわばの頭の縁の下にはおりこんでおいたと。

たしか最近まで骨が残っていたちゅう話やが・・・。

